2024 年度 学位論文

平民詩と民謡創出

『萬朝報』における「俚謡正調」欄に着目して

慶應義塾大学
総合政策学部総合政策学科 4 年

学籍番号:72006811
氏名:林和花

要旨

本研究は、明治後期における「民謡」概念の受容過程において、『萬朝報』紙上で展開された「俚謡正調」欄に着目し、その思想的背景と実践の意義を明らかにするものである。これは、都々逸を新聞紙上で「俚謡正調」と名付け、二十六字の平民詩として募集するものである。明治後期の国民文学運動において、Volkslied (Folksong) の翻訳語として「民謡」概念が受容される過程は、これまでドイツ・ロマン主義の影響を中心に論じられてきた。しかし本研究は、この受容過程において、儒学的な民謡観との混淆や、都々逸や花柳界の旧弊改良という課題が介在していたことを指摘する。

第 1 章では、民謡概念の受容過程における、ドイツ・ロマン主義による民謡概念と儒学的発想による民謡観の混乱を指摘し、俚謡正調運動をその過程を紐解くものとして位置付けた。第 2 章では、都々逸が地方の節が花柳界で洗練されて発生し、そして文芸化する過程を記述した。自由民権運動の過程において、都々逸が小新聞上に新たなポジションを獲得する過程を明らかにした。第 3 章では、『萬朝報』のメディア実践を黒岩涙香の新聞観などから記述し、その延長線上に俚謡正調運動があることを示した。これは文部省による民謡蒐集と一部重なりながらも、異なる位相を持つものであり、民謡概念の成立において都々逸の歌詞や花柳界の改良が遠因として働いていることを明らかにした。

本研究の結論として、従来日露戦争期における国粋主義的なもの、ないし経営戦略として理解されてきた俚謡正調運動が、黒岩涙香の風教の実践を兼ねていることことを示し、それが自由民権運動における小新聞の戦略を受け継ぐものであることを示した。また、この過程で、新聞を通じた風俗の改良と投書による読者の参加が相互に作用する様相を明らかにした。これにより、本研究は明治期における「民謡」概念の受容を、単にドイツ・ロマン主義の移入としてではなく、メディアによる実践や文化改良運動との関連の中で捉え直す視座を提供するものである。

キーワード：民謡蒐集、萬朝報、投書文芸、都々逸

目次

第 1 章
1-1 研究背景と目的
1-2 民謡概念の整理
1-3 俚謡正調運動に関する先行研究と方法

第 2 章 都々逸の展開
2-1 ジャンルの成立と変遷
2-2 都々逸のテキスト化

第 3 章 『萬朝報』と俚謡正調運動
3-1『萬朝報』における教化と娯楽
3-2 俚謡正調運動

第 4 章 結論
第 5 章 参考文献

1-1 研究背景と目的

ドイツ・ロマン主義に影響を受けた明治後期国民文学運動において、Volkslied（Folksong）の翻訳語として「民謡」概念を受け取った。これは主に 2000 年代以降の国文学研究領域でその過程が実証され(品田 2001)、文学領域のみならず、音楽研究や文化研究にも大きく影響を与えている。『帝国文学』が中心舞台となって行われた明治後期国民文学運動では、日本の国詩革新や国語、国民音楽の基礎として、民謡を研究する重要性が説かれるようになる[1]。その議論の末に、文部省による国家的、或は帝国的規模での民謡蒐集が推進されることとなった。また、大正期や昭和期にかけて民謡概念が広がるにつれ、民間でも民謡集の編纂が行われ、新民謡運動とよばれる民謡風の音楽、詩歌創作運動も発生した。

これら民謡に関連する様々な文化の形成過程は、国民国家統合の問題や、近代化の観点と併せて論じられ、民族文化形成というグローバルな伝播の一環をなすものとして研究が進められている。そこでは、「民謡」の語がヘルダーやゲーテの受容とともに Volkslied の訳語として成立した、ドイツ・ロマン主義的な概念であることが強調されてきた。しかしながら、この概念が受容されつつあった 1900 年前後においては、『帝国文学』においても

[1] 品田悦一. 2001. 万葉集の発明：国民国家と文化装置としての古典.新曜社.

その語義が若干の混乱をきたしており、当時学問の前提となっていた儒学的な発想に基づく民謡概念の理解も為されていたことについてはあまり言及されない。

また、民謡にまつわる文化形成に着目する上で、複数の研究者が日露戦争期に『萬朝報』で行われた「俚謡正調」欄に注目している。これは、七七七五の二十六字を基本とする都々逸を、「大和民族の心意気」をうたう平民詩として定義づけ、新聞上で投書するキャンペーンである。これは専ら、日露戦争期における国粋主義的な活動、ナショナリズムを煽るキャンペーンとして言及されるのみで、その成立に至る背景について十分に研究されてきたとはいえない。しかしながら、「俚謡正調」欄は『帝国文学』におけるドイツ由来の民謡概念の受容、この直接の影響下として説明がつかない運動であり、かつ文部省による民謡収集に先んじて発生したものである。よって、Volkslied の翻訳語としての「民謡」の成立では説明不可能な領域を含んでおり、日本における民謡概念の受容や変遷を分析する上で注目に値する。後述するが、この『帝国文学』における議論では、『萬朝報』のメディア上の取り組みが言及されることもあり、民謡概念の形成や民謡蒐集の実行にあたってその時代背景を共有するものである。

よって、本研究では近世の小唄である都々逸がメディア上の文芸となる過程を概観した上で、『萬朝報』創刊者の黒岩涙香の思想的背景を追跡し、その実践のひとつとして俚謡正調運動を位置付ける。そのメディアとしての特質や思想的背景を明らかにすることにより、国民詩の創出や民謡蒐集の計画が進められていく『帝国文学』の外で、通奏低音をなした『萬朝報』と国民文化創出の諸相の記述を試みる。これにより、「民謡」概念の形成過程において、ドイツ・ロマン主義の受容以外の側面に光を当てることを目標とする。

1-2「民謡」概念の整理

まず確認しておくべきは、「民謡」という概念の面妖さである。国文学、民俗学、音楽学など、どの学術的見地に立つかによって「民謡」の指し示すものが少しずつ変わり、研究者や時期によっても当然見え方が異なる。それでありながら、我々は地域の祭事や日常生活のなかで民謡らしきものに触れ、義務教育課程においても幾らかの時間をかけて民謡について学ぶ。城(2020)は学校教育の観点から次のように指摘する。日本民謡の学習指導要領は、音楽科のみならず、国語科、社会科、体育科、道徳科、総合的な学習の時間など複数の科目にわたっている。民謡に対する見解の不一致は、民謡を生活の娯楽としてとりいれる上では問題なくとも、教育現場においては統一させることが求められる[2]。

一方、民謡概念については批判的研究も重ねられ、社会学や文化資源学といった領域からも近年アプローチされている。この研究群では、特に品田（2001）の研究が頻繁に参照

[2] 城佳世. 2020.日本民謡の概念の変遷 ： 国文学・民俗学・音楽学を中心に.九州女子大学紀要 57,1.pp.57–67.

される。品田は主に明治・大正期の膨大な資料から、万葉集が国民歌集として価値づけされていく過程を緻密に検証する。その中で、在来の歌学や国学とヨーロッパ由来の諸観念が融合し、国民の詩歌が国家的課題として希求された歴史が「明治後期国民文学運動」として整理されている。

翻訳語としての「民謡」は 1892 年森鴎外が使用し始め[3]、明治後期国民文学運動の中心舞台『帝国文学』上で上田敏らが頻繁に持ち出すようになった。但し、「Volkslied」の翻訳案は他に「俗謡」「俚謡」「国風俚歌」などと当時乱立しており、観念が先行して「俗謡」が称揚されることもあった。何が実際に「Volkslied」にあたるのかは、後から検討される事項であって、1890 年代後半から 1900 年代初頭には「俗謡研究」と称して吉原へ向かう学生もあった。「民謡」がヘルダーに由来するとはいえ、ひとたび「俗謡」の語へと置き換えられたならば、地方性や自然性を帯びた田植え唄よりも、より身近な三味線音楽のイメージがむしろ喚起される場合があったのである。

『帝国文学』において、この訳語や意味内容の混乱をひとまず落ち着かせたのが、1904 年 1 月『帝国文学』上に発表された上田敏「樂話」である。ここで「民謡」の語は「Volkslied」を指し、農村や漁村の労働歌など自然発生的な歌を意味することが規定された。それと同時に、三味線音楽や花柳界の産物はここから排除すべきことも強調される。ここから『帝国文学』上では、民謡といえばヘルダーやゲーテらドイツの詩人に由来する、Volkslied を指すものとなっていくのである。

しかし、ここで注意しておくべきは、訳語としての「民謡」が登場する以前から、民間の歌を織り交ぜた歌集やそれに対する註釈は受け継がれてきたということである。鈴木(2011)も指摘するように、限られた知識層においてとはいえ、民間歌謡を収載して地域色を織り込むという発想自体は『詩経』『楚辞』などの漢籍に発し、「歌」といえば広く民間の歌謡全般を指してきた[4]。先ほど挙げた「国風俚歌」は巖谷小波の訳であるが、『詩経』を踏まえ「Volk」を「国風」としている。上田敏による 1904 年の定義づけが広く影響を及ぼしたとはいえ、中国の礼楽思想に基づく政教主義的詩観が即時に置き換えられた訳ではなく、1900 年代においては未だ混乱していた。1906 年「日本民謡概論」においても、志田義秀はドイツの民謡研究の事例を丁寧に紹介することによって Volkslied 概念の理解を改めて促している。

よって、次のように整理できる。日本の近代的制度に目を向けて民謡採集を考える際、明治中期より国文学領域で輸入されたヘルダーの民謡観による影響は到底無視できず、多

---

[3] この時点では森鴎外も、尊ぶべきものとしてこの語を使用していない。むしろエキゾチシズムや『詩經』由来の発想を持ち、他のヨーロッパ文明よりも粗野なものとしてギリシャ民謡を眺めている。

[4] 鈴木貞美.2011.民謡の収集をめぐって―概念史研究の立場から.『近代東アジアにおける鍵概念―民族、国家、民族主義』中山大学・国際日本文化研究センター共催国際シンポジウム報告書.国際日本文化研究センター.

くの研究がこれを跡付けてきた。しかし、民間歌謡を採り入れる発想自体は漢詩文に由来し、中国や日本の文芸において連綿と続いてきたものである。また、当時の議論を主導した国文学者らは、旧来の教養を受け継ぎつつ新たな制度の中で刷新してきた。旧来的な民謡観の再解釈とドイツ由来の民謡観の受容が同時に引き受けられ、観念が融合していく中で、実際に何を民の歌とするか、いかに蒐集するかという次元でさらに多様な試行錯誤と実践が行われたのである。

このような視座で民謡蒐集を捉えた場合、例えば旧来の中国的民謡観とドイツ・ロマン主義的民謡観が蒐集の実行段階で混乱する様子を非常によく示す、임경화(2010)による研究をみることができる。1910 年代の朝鮮で民謡蒐集をするにあたり、口語に一体の国民性を求めようとする民謡概念に矛盾が生じた際、蒐集に当たっての論理立てはむしろ中国的民謡観に接近したことが分析されている[5]。

以上を鑑みると、民謡蒐集が国民統合の役割を果たし、民謡が近代的制度の賜物であったとしても、エリートの構想が上から下へ、そのまま反映されるようなスタティックな仕組みが存在していたわけではない。蒐集にあたる現実の諸条件の中で摩擦をきたしながら、民謡観や蒐集方法もまた試行錯誤された。そこでは東アジアの古典と日々流入するアルファベット、そしてその翻訳語が入り混じっている。「民謡」という語の多義性や曖昧さは、明治期以降、混迷を極めたこの紆余曲折の結果であるといえる。

1-3　俚謡正調運動に関する先行研究と方法

俚謡正調運動に関する政治的側面に関しては、次のような評価がなされている。坪井(2006)は俚謡正調運動について、「一九〇〇年代の＜新民謡＞と言うべきものの創作が志田らの提唱になる民謡蒐集運動に先駆して現れている点は興味深い」としながらも、「安手のナショナリズムを煽るもの」であり、「俚謡（民謡）の定型（正調）化は、民心の定型化と一体のものとして進められた」と評価している。なお、ここで言及されている志田義秀は、『帝国文学』上において民謡概念を定義づけた。ここにおいて、国詩革新、国語改良、国楽改良の基礎として民謡研究の必要が説明され、全国規模の方言調査と同時期に民謡蒐集が行われた。坪井はこの民謡蒐集により、「民謡文字化の集成は図らずして帝国の版図を描き出すという効果があった」と指摘している[6]。

また、齋藤（2012）は、俚謡正調運動を新民謡運動の黎明期に位置付けたのち、色川大吉による明治 20 年代、30 年代の思想分析を応用して整理している。そこでは、内村鑑三に代表される「民権」としてのナショナリズムをとっていた『萬朝報』は日露戦争に反対する立

---

[5] 임경화. 2010.민족'의 소리에서 '제국'의 소리로 - 민요 수집으로 본 근대 일본의 민요 개념사. *Journal of Japanese Studies* (44):5–27.

[6] 坪井秀人. 2006. 感覚の近代：声・身体・表象.名古屋大学出版会.

場にあったが、参戦論を掲げるに転じた。これは民権と国権の共存が不可能となった日露戦争期において、「国権」をとるに至ったものであり、「俚謡正調」はこれを代表する詩との整理がなされている[7]。

「俚謡正調」欄については、歌謡史、都々逸の歴史の中でも言及がなされている。西沢(1990)においては、その意図を戦時下における国民精神を煽り『萬朝報』の人気を高める策として紹介されており、退社した内村鑑三らとは違ってあくまで経営者としての利益に注目したものと評されている。

また、文化資源学の領域において、渡辺(2013)は「正調」という概念をめぐる考察の一つとして「俚謡正調」欄をとりあげている。しかし、そこでは主に『萬朝報』において、創刊者の黒岩涙香に代わってのちに撰者をつとめるようになった湯浅竹山人という人物が中心となって記述されており、黒岩涙香の企図については十分に検討されていない。しかし、「正調」という概念が地方文化の復興や邦楽改良、座敷歌の崩れた歌い方を排する動きなどと複雑に絡み合う様相が記述されている[8]。

『萬朝報』や黒岩涙香に関する研究は多く存在しているが、この「俚謡正調」欄については涙香の多趣味な人物像を表現する、趣味のひとつとしての記述に留まることが多い。『萬朝報』は内村鑑三といったキリスト教者や幸徳秋水、堺利彦といった初期社会主義者らを擁していたことから、齋藤（2012）は「社会主義的」新聞としている。しかし、その創刊者である黒岩涙香の政治的思想に関しては言及されていない。

よって、本研究では、黒岩涙香の新聞観やその思想的バックグラウンドに着目し、『萬朝報』のメディアとしての特質とともに記述する。俚謡正調運動に至るまでの過程に重点を置き、その意図するところや読者への効果の説明を試みる。特に、これが文部省による民謡蒐集に先立って始まっていることから、その意図がドイツ・ロマン主義による Volkslied 概念に直接支えられたものではなく、むしろ임경화(2010)の示すところの礼楽思想に基づく政教主義的詩観に支えられていると仮説を立て、『萬朝報』のメディアにおける実践を儒学の理解に基づく読者の「教化」の側面に注意しながら記述する。

また、俚謡正調運動に関して、民謡の蒐集や創作の実践のひとつとして着目する場合、その対象が「都々逸」であることがともすると見落とされがちである。よって、「都々逸」というジャンルが江戸後期から明治期にかけて出版文化とともに変遷する過程を記述し、その変化のひとつとして「俚謡正調」欄を扱う。

---

[7] 齋藤桂. 2012.黎明期の新民謡 ——「俚謡」と「民謡」をめぐって.日本伝統音楽研究 9: 43-55.

[8] 渡辺裕. 2013. サウンドとメディアの文化資源学：境界線上の音楽.春秋社.

第 2 章　日露戦争期までの都々逸

序論

この章では、日露戦争期に発生した俚謡正調運動を理解する前提として、その対象となった都々逸の歴史的展開を紹介する。俚謡正調運動は、『萬朝報』において既存の都々逸を「改良」しようとする試みとして始まった。では、その対象となった都々逸とはいかなるジャンルだったのであろうか。本章では、遊里から発生した都々逸がジャンルとして確立し、さらに活字メディアへと展開していく過程を跡付ける。

都々逸に関しては、西沢爽氏による『日本近代歌謡史』において膨大な実証的研究がなされており、その旋律や担い手に関してはジェラルド・グローマー氏『幕末のはやり唄:「口説節と都々逸節の新研究」』によって緻密な考証がなされている。本研究では、これらの成果を踏まえつつ、都々逸が活字メディアへと進出していく過程に重点を置いて整理する。

具体的には、まず 2-1 節で都々逸というジャンルの成立過程を概観し、地方の民謡が都市文化として再編成されていく様相を確認する。次に 2-2 節では、戯作者による都々逸本の出版から新聞・雑誌における投書欄の設置まで、活字メディアにおける都々逸の展開を追う。『萬朝報』やここで紹介する新聞雑誌の他にも、当時多くのメディアが都々逸欄を設けており、人々の日常実践や作例についてはさらに多様で興味深い事例も多い。その大部分をここでは捨象し、あくまで俚謡正調運動を考える上での前提を提供する上でこれを紹介する。

2-1 ジャンルの成立と変遷

地方の節から都々逸へ

都々逸は、よしこのや情歌とも呼ばれ、幕末から明治期にかけて流行した俗謡の代表的な一種である。三味線を伴い、男女間の情愛を七七七五調でうたうはやり歌であった。そのお座敷芸的な性質は、その発祥が名古屋の花街であることからも説明できる。

花街の流行歌ときくと、地方の労作歌とは対照的な、洗練された都会文化という印象を受けるかもしれない。しかしながら、花街は大都会と地方の文化が混交する接点として機能しており、日々流行する歌は地方の歌と切り離せない関係にあった。流行歌の担い手であった花柳界の芸人たちは、田舎歌を三味線によって洗練させ、方言抜きの清音でパフォーマンスを行った。花街を訪れる多様な身分や出身地の客もこれに合わせて歌ったことだろう。江戸時代の流行歌の特徴は次のようなものであった[9]。

---

[9] Groemer, Gerald. 1995. 幕末のはやり唄:「口説節と都々逸節の新研究」.名著出版. p29

近世の流行歌の大半は、そのはやりすたりが、江戸、京都、大坂、名古屋などの大都市の市民によって決定づけられていた（中略）。ところが、流行歌の多くの旋律は、地方から輸入されたものであり、それ故、これは生え抜きの都市市民にとって、あるいは地方出身者の一部にとっても、まさに新作として聞こえ、地方出身の芸人の風俗や行動も斬新に感じられたに違いない。こうした新しさに触発され、都市市民の中には、数多くの新歌詞（替え唄）を作り、瓦版の販売による利益を期待するものが生まれた。都会で作られ、新しく出版された歌詞が実際に歌われると、そのパフォーマンスから都市文化と地方文化を兼ね備えた「ハイブリッド」な唄が生じた。そしてこの異なった要素の混在こそは江戸時代の流行歌の最大の特徴をなしたといえよう

都々逸はまさにこのようなハイブリッド性に支えられたジャンルである。歌詞本が都市部にて流通し、流行を刷新し続けた。一方で、旋律に着目すると、常陸国に発生した潮来節が上方へ流れていき、よしこの節、宮宿にて流行した神戸節などのさまざまな地方の要素が混交して出来上がっている。萬朝報で俚謡正調欄の選者をつとめ、小唄や民謡の研究を進めた湯朝竹山人は、秀吉時代の隆達節、徳川秀忠時代の弄斎節、元禄時代の投節、家治時代の潮来節、家斉時代のよしこの節、家斉時代の都々逸坊扇歌というように、その源流を更に遡って探究した。これら節同士の関係については深入りしないが、ともかくも都々逸の旋律の歴史を辿ればいわゆる「民謡」としてイメージされやすい様々の地方の節の存在が浮上する。ただし、このように人々が都々逸の系譜を辿り始めたのは明治中期である。湯朝竹山人は、『小唄研究』の中で次のように考察する[10]。

都々一節の起源と推移とを一層解明せんには、文献記録の精探を要求せねばならぬ。（中略）我が都々一節の文献的研究は、私の記憶する範囲では、やうやく明治中期以降に発表され来り、先づ、蜃気楼主人岸上操氏著、明治二十三年十一月発行「新選歌曲集」第一巻の「都々逸総説」を以て先鞭をつけたものといふべきかと信ずる。(『小唄研究』1926 年 p.282)

演芸としての都々逸

地方の節々が名古屋の宮宿という花街で洗練され、都々逸というジャンルが形成されたことは先述した。この都々逸を、江戸の寄席芸として確立し、誰にでも歌いやすい旋律の形成に大きく貢献した[11]のは、寄席音曲師である都々逸坊扇歌である。

都々逸が江戸に流入し流行し始めたのは文政期とされる。文政の末頃に都々逸坊扇歌は常陸国から江戸へ足を運び、「音曲噺」の元祖である船遊亭扇橋の門下として寄席へ出演す

---

[10] 湯朝竹山人著『小唄研究』,アルス,大正 15. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1018907 (参照 2025-01-20)

[11] Groemer, Gerald. 1995. 幕末のはやり唄:「口説節と都々逸節の新研究」.名著出版.P.38

るようになった。江戸だけでなく名古屋など各地にも巡業し、次第に人気を獲得した都々逸坊扇歌は他の芸人とは一線を画す存在になっていく。都々逸は他の音曲師によっても披露されたが、扇歌はその中でも別格で「どゝ一元祖、うかれぶし、扇歌」と謳われた。天保改革期には、寄席の取り潰しや鳴り物の禁止が行われたが、弘化には活動を再開して大人気となり、都々逸を代表する人物として現代にも語られている。なお、都々逸坊扇歌は名跡となっており、1901 年末には柳家つばめが 5 代目を襲名した。その様子が当時の新聞雑誌にもニュースとして掲載されている。

◉五代目都々逸坊扇歌
都々逸坊扇歌の名は柳派に由緒深き名家なりしが四代目没後は暫く中絶し居たる處兼て寄席の樂屋中にて其噂の有りし如く今回定連及び同業者の勸告に依り柳家つばめが五代目を相續する事となり此程淺草公園の料理店松島に於て改名披露の宴を開き來年一月の初席より五代目都々逸坊扇歌の看板を掲げ得意の音曲噺を演じ且つお土産として毎夜新作の都々逸二ツ三ツづゝ唄ふ由にて既に贔負漣より純子縮緬等の後幕敷張を贈られしと云ふ （『人情世界』1901 年 12 月 8 日刊行 43 号掲載「藝林」p.43）

贔屓連（中）という言葉は歌舞伎用語としてしばしば使用される[12]が、都々逸、寄席の音曲においてもファン集団を形成していたことが窺える。

上方の「よしこの」
名古屋に発した都々逸節は江戸へと流入し、都々逸坊扇歌の人気によってジャンルとして確立した。一方で、名古屋から関西方面にも都々逸やそのルーツにあたるよしこの節が伝播し、また名古屋へと逆輸入することも起こったようたが、その愛好者には江戸とは違った傾向がみられた。
西沢(1990)によれば、情歌（都々逸、よしこの）は江戸では一般民衆に強く支持され、上方では趣味人が愛好する対象となった。したがって、都々逸本の中でも美しい装幀の板行は次第に上方に活発化[13]したようである。この情歌という名前は、よしこの節ないし都々逸の別名として関西に使用され始めたものであった。
鶯亭金升（1868～1954）は記者や戯作者として知られ、萬朝報と團團珍聞の記者を掛け持ちしていた時期もある人物だが、都々逸にも長じていた。鶯亭金升は、関西と関東の都々逸（よしこの）の楽しみ方について次のように振り返っている。

中京から出た二十六字の唄は、（中略）其のドゝイツが関東に入り、扇歌が粋な唄にし

[12] 山下洋子. 2023.歌舞伎の芸談を資料とした近現代日本語の研究.立教大学.
[13] 西沢爽.1990. 日本近代歌謡の実証的研究.桜楓社. P.514

て「都々一坊」と名乗つたので、都々一となり後に都々逸となり情歌となつたが、関西へはヨシコノが入つて、好此から情歌になつた。東の都々逸は俳諧の点取の如くに会を開くを例にして居たに比して、西の好此は酒席を主として派手な会をやる。此の例を作つたのは大阪の鴻の池の店員ださうな。京都でも華やかにやる事にして居た。

（『明治のおもかげ：鶯亭随筆』1953 年「よしこの」p.256～257）

この随筆ではその後、幕末の京都のよしこの会で豪遊したことによって破産し、家を潰した人があったことが語られている。このことからもわかるように、幕末期の時点において、関東では俳諧や寄席文化が基盤となって都々逸が親しまれていた一方で、関西においては裕福なパトロンによって支えられた、より華やかな酒席の文化としてもよしこのが栄えていた。

このようにやや趣向が異なる文化として浸透した江戸の都々逸と上方のよしこのであるが、次第に関東の都々逸愛好家らの勢力が関西にまで及んだようである。西沢(1990)によると、日清、日露戦争期ごろから財界の浮き沈みが激しく、関西のよしこの界は衰退していったのに対し、民衆的基盤を持った東京の都々逸愛好家らは勢力を拡大した。鶯亭金升は門下生を率いて「升連」と呼ばれる都々逸界の勢力を東京で結成していたが、明治 20 年代には上方にも影響力を持つようになっていた。なお、情歌という名称と鶯亭金升については次節で詳述する。

2-2 文字としての都々逸

第 1 節では、都々逸が様々な地方の節が名古屋の花柳界で洗練され、江戸や上方の文化としても根付いたことを確認した。次に本節では、都々逸が文芸となって新聞の投書欄へと新たなポジションを獲得したことを紹介する。

戯作者による文戯化

都々逸は民衆的なうたである一方で、富裕な階層や数奇者が詞句をつくる文戯にも転じていった。その嚆矢は文政末、天保初頃の為永春水らの文戯連といわれている[14]。為永春水は人情本『春色梅児誉美』でよく知られる戯作者であるが、都々逸は人情本の中にもしばしば登場する。人情本は都々逸の発信源であった寄席、岡場所ともに天保の改革（1841）の規制を受けたが、綱紀粛正を乗り越えて都々逸は再度流行し、戯作者の手による都々逸本も続々と出版された。また、流行歌の歌詞は瓦版でも流通しており、都々逸坊扇歌の名前や肖像が乗ったものも頻繁に出版された。歌詞の作者の多くは名を知られるこ

[14] 西沢前掲.P.900

となく埋もれたが、仮名垣魯文はここから名を成した数少ない例外である[15]。

投書文芸としての都々逸

戯作者の手によって文戯となった都々逸は、出版技術の進展と共に、戯作者による歌詞本や瓦版から新聞雑誌の投書コーナーへと新たなポジションを獲得していくこととなる。

投書という言葉が生まれ、読者の投書活動が始まったのは 1872 年である。明治初期は発行者に取材力が伴っておらず、それを補う常連投書家が記者と同じく「先生」として支持されることもあった[16]。一方、読み書き能力に乏しい人々を新たな読者として招き入れるという目的を背負った明治初期の小新聞において、詩歌の投書が読者層の取り込みの手段としても用いられた。例えば、仮名垣魯文は 1875 年に代表的な小新聞のひとつ『仮名読新聞』を創刊しているが、『仮名読新聞』上には和歌や狂歌、俳諧等とともに都々逸の投書も募集されていた。詩歌の投書欄がまじめな文に馴染みの薄い民衆を取り込む手段であることは編集部と読者が相互に認識していたようである[17]。都々逸の投書欄は、『読売新聞』『都新聞』など他の小新聞や雑誌にも設けられた。

『團團珍聞』と鶯亭金升

また、都々逸は小新聞だけでなく、『團團珍聞』という風刺雑誌（英雑誌『パンチ』の影響下にある、いわゆるポンチ絵を載せた政府批判雑誌）にも掲載されている。幸徳秋水はここでは「いろは庵」と名乗っていた。1877 年 3 月創刊のこの雑誌には、同年 5 月から廃刊まで都々逸欄が設けられている[18]。自由民権運動の活発な地域[19]に売捌所が多いこの雑誌は[20]他の小新聞と同様、硬い論説文に関心を持たない読者に対して呼びかける手段のひとつに都々逸を掲載している。

鶯亭金升が「升連」という都々逸のグループを率いていたことなどは先に触れたが、10 代の彼は『團團珍聞』の熱心な投書家であった。その投書が主筆であった梅亭金鶯の目に止まり、投書の選者として採用されたのである。内野(2023)によると、後期の『團團珍聞』において都々逸の投書が増加しており、その理由としてこの金升の入社と、「團團連」

---

[15] Groemer, Gerald. 1995. 幕末のはやり唄:「口説節と都々逸節の新研究」.名著出版.p.44

[16] 山本武利. 1976.「明治期の新聞投書」.関西学院大学社会学部紀要, no. 33: pp61-70.

[17] 土屋礼子. 1991. 「『仮名読新聞』投書欄の詩歌と作者たち」.一橋論叢 105 (2):pp255-274.

[18] 金升により都々逸と情歌は別のコーナーで募集されていたが、ここではどちらも都々逸として記述した。最終号まで掲載されたのは「情歌」で、「都々逸」欄は間際の 1907 年 7 月 6 日発行の 1651 号が最後の掲載となっている。

[19] 東京のほか、栃木・群馬・千葉・神奈川・静岡・兵庫など

[20] 長沼秀明,〈笑い〉をめぐる文明開化の時代相 ：『団団珍聞』創刊者・野村文夫, 笑い学研究, 1997, 4 巻, pp 23-30.

という都々逸の投書家グループの形成が指摘されている[21]。
また、都々逸の別名に「情歌」があるが、これはよしこのの別名として関西に使用され始めた名称である。この名称はさらに、『團團珍聞』において鶯亭金升が都々逸の新派として使い始めたことが後年のインタビュー[22]で明かされている。

> 都々逸が花柳界の方面ばかりを題材にしてゐたのを、新婚などを扱ひ、家庭方面に立ち入らうと考へて、都々逸でなく、何か外の名を附けやうと思つてゐた際、大阪の方で情歌といふ事を言つて居たので、それを用ゐたのですが、題材も違へば、調子も變つて來た譯です。(『新演芸』1946 年 9 月「對談」)

つまり、従来の都々逸のイメージから離れ、家庭的内容[23]を『團團珍聞』上で募集すべく、都々逸の新派、それも家庭的内容を詠むものとして「情歌」という名称が与えられたのである。金升の「情歌萬題集」は 1895 年 12 月中旬発売予定として『團團珍聞』上に発売広告が出ている。これは「彼の猥褻拙劣なる都々逸を数多く集めたる普通の冊子の比にあらざる」ものだという売り込みである[24]。この時期にはだんだん「家庭」という概念が理想的イメージとして日本に浸透してきた。

また、鶯亭金升は次章で扱う『萬朝報』の記者を兼任した時期があるが、その都々逸欄である「俚謡正調」欄の選者となることを打診されたことも回想している。金升はある日『萬朝報』主筆の黒岩涙香に呼び出され、「今度俚謡正調といふものを始めやうと思ふが、一つその選者をやつて貰ひたい、就ては此の際團團珍聞を止めて貰ひたい」との依頼を受ける。しかし、『團團珍聞』の入社をすすめたのは師匠にあたる梅亭金鵞であり、『團團珍聞』を辞めるわけにはいかない。『團團珍聞』『中央新聞』の経営者である大岡育造に相談して、1898 年『萬朝報』から『中央新聞』に移籍している[25]。金升が退社したのちの『萬朝報』で「俚謡正調」欄が成立するまでの過程は次章にてみていくこととする。

小結

本章では、都々逸の歴史を主に文政期から俚謡正調運動が始まる以前まで確認した。
都々逸は地方の節が集まって、名古屋近辺の花街である宮宿に発祥した。文政期に江戸へ

---

[21]内野真緒. 2016.「佳作論文 明治期の川柳と都々逸：『團團珍聞』の投書を中心に」.國學院雑誌 117 (8):69–80.

[22] 79 歳頃のインタビューであるが、『鶯亭金升日記』とも整合性がとれている。『新演芸』(1),光友社,1946-09.

[23] 家庭的な調子となった情歌の例として「乳の汚れを干す桃の枝　花も産着の色に咲く」という歌を挙げている。

[24] 『團團珍聞』(1032),珍聞館,團團珍聞社 ,1895-11-03.

[25] 「1898 年（明治 31 年）4 月 29 日本日朝報社を退き、中央新聞社に入り、団々珍聞の編緝を兼ぬる。」(『鶯亭金升日記』)

と伝播し、音曲師である都々逸坊扇歌が寄席文化として大成させた。一方、上方ではよしこの節として江戸とはやや別の発展を遂げ、美麗な絵の入った都々逸本もあった。

さらに、戯作者の手によって文戯化していった都々逸は、出版文化の発展とともに、小新聞にも進出していく。明治初期から中期にかけて、自由民権運動に関与した戯作者らは硬派な社説に関心を示さない人々に向け、娯楽記事を多く書いた。そのひとつとして、文芸ジャンルとしての都々逸が楽しまれていたのである。

第3章　『萬朝報』における「俚謡正調」欄とその成立背景

俚謡正調運動は、都々逸を二十六字の平民詩として再定義し、その投書を募集するキャンペーンである。日露戦争期に都々逸は「俚謡正調」と名づけ直されてしまう。第2節では涙香自身の言葉で書かれた全文を確認するが、その募集文はおおよそ次の通りである：今の都々逸は「卑猥取るに足らざるが如き」だが、実はこれは堕落してしまった姿であり、本来はこのようでない。潮来節やさらにその昔に遡れば「大和民族の再適なる気風より出でゝ或は天地の美を詠じ、或は人情の妙を講ひ、聞く者をして一唱三嘆せしむるも有りき」。よって、本来の正調に戻すべきである。賛成者は葉書を寄せよ、その正調に叶うものは報酬を贈ろう。

都々逸を「俚謡正調」と改称する試みは、些か大袈裟に映るかもしれない。しかし、なぜこのようなコーナーが成立したのだろうか。既存の言及の多くは、黒岩涙香の趣味あるいは経営上の利益という側面に着目するか、日露戦争期という時節からの理解であった。これらの解釈は重要であるが、『萬朝報』の特質や思想的背景を十分に説明していない。単なる趣味や読者へのアピールであれば、既存の娯楽を「取るに足らない」と否定し名付け直す必要はどこにあるのだろうか。また、このコーナーが日露戦争期に成立し、当初戦争にまつわる内容が多く掲載されたことは事実である。しかし、これが戦争を煽るためであったとして、なぜそこに潮来節を持ち出す必要があるのだろうか。

『萬朝報』は政府や政党から独立し、薄利多売戦略を取っていた。つまり、広く多くの読者が読み続ける限りにおいて存続する新聞であった。通俗的娯楽の導入は経営上の必要であると同時に、涙香にとっては人心の教化、社会改良という倫理的な意味をも帯びていた。「俚謡正調」運動も、こうした『萬朝報』の編集方針の延長線上に位置づけられる。すなわち、都々逸という通俗的娯楽を取り込みながら、それを「平民詩」として再定義し、より高次の文化へと導こうとする試みであった。その際涙香が依拠したのは、ドイツ・ロマン主義的な民謡観というよりも、むしろ『詩経』的な教化の論理である。民の歌を集めて正しく情け深い調べを選び、それを範として示すという発想は、活字メディアの持つ民心の画一化作用とも親和的である。しかし同時に、この運動は読者の自発的な投書活動を通じて展開されており、各々の感情が込められている。つまり、上からの教化と下からの読者参加が、複雑に絡み合いながら展開したのである。また更に、涙香が読者に教

え導いたのは、明治期に目まぐるしく整備された近代的法秩序に則って、世界の真理を論理的に探究するという認識枠組みそのものである。

よって、本章では「俚謡正調」運動を、次の 2 節に沿って分析する。3-1 では、『萬朝報』における教化と娯楽という観点に重点を置きつつ、涙香の新聞観とその実践を明らかにする。3-2 では、俚謡正調運動の論理と実践を、これまで整理した『萬朝報』の特質とともに確認する。

3-1『萬朝報』における教化と娯楽

黒岩涙香の略歴

1892 年創刊の『萬朝報』は、大衆紙の先駆けとも称されるが、大衆という存在の萌出とともに形作られた新聞である。それまでの新聞社はまだ安定した企業として成り立っておらず、経営悪化や発行禁止等の弾圧によって立ち行かなくなることも多かった。また当時の記者は複数の新聞社を掛け持ちし、各紙を渡り歩くことも一般的であった。例えば、第 2 章で言及した鶯亭金升（1868～1954）も、戯作者の梅亭金鵞門下として『團團珍聞』に入社し、『改進』『萬朝報』『中央』『読売』『東京毎日』と転々とした[26]。さて、『萬朝報』を自ら立ち上げることとなる黒岩涙香も、学生時代から数々の投書が新聞雑誌に掲載され新聞界に進んだ人物である。その経歴を次に示す。

黒岩涙香(1862～1920)は土佐の郷士の次男に生まれた。暦学者の家に生まれ、父が文芸や算学・天文、砲術・弓槍の技芸を教えていた[27]私塾に学び、その後大阪の英語専門学校に入学する。東京では成立学舎、慶應義塾大へ進んだが中退もしくは退行処分になった[28]。英語、数学や化学にも秀でていた。『東京輿論新誌』『同盟改進新聞』『日本たいむす』『絵入自由新聞』『都新聞（今日新聞)』を経て『萬朝報』を立ち上げ、そのセンセーショナルな報道で「蝮の周六」と恐れられもした。「鉄仮面」「巌窟王」「噫無情」などの翻案小説を発表し、探偵小説の祖とも呼ばれる。一口噺、語呂合わせ、狂歌、川柳、五目並や詰将棋その他多くの趣味に通じる多才の人であった。

このように新聞人、小説家、翻訳者、思想家あるいは趣味人とあらゆる方向で才能を発揮した人物であるが、その出発点では、学問や政界の道へ向かう選択肢もあった。土佐出身で自由党にも縁故があり、数々の演説会にも参加した。自由党、改進党、嚶鳴社からも誘いを受けたが、自由民権運動の参加者の中では若年で「頭の上がる見込みはない」と考

---

[26] 日外アソシエーツ「20 世紀日本人名事典」(2004 年刊)

[27] 奥武則. 2014.『黒岩大』とは誰なのか:『涙香伝』のために.社会志林 60 (4).p.75

[28] 塾員姓名録には掲載されている。佐藤林平. 1979.黒岩涙香と萬朝報.英学史研究 1980 (12)pp..129–35.

え政治家とはならなかった。学者になろうとも考えたが、遂に新聞に入ったという[29]。民権派の記者から官界へという進路も十分あり得[30]、親類にも勧められたがこれを拒否した。

明治中期の新聞界

涙香の進んだ当時の新聞界は、大新聞と小新聞の区別が曖昧になっていく情況にあった。明治 15 年以降、民権運動の影響下で政党機関紙が重要な位置を占めるようになり、涙香の在籍した小新聞は政党の基盤強化、読者層拡大の任務を負っていた。例えば『絵入自由新聞』は自由党系機関紙『自由新聞』の傍系小新聞である。土佐自由党系（夢柳宮崎富要、半狂和田稲積）と仮名垣系の花笠文京が主力[31]として在籍していた。『都新聞』では仮名垣魯文が初代主筆をつとめたが、これら小新聞には戯作者の書いた演芸や花柳界の記事がよく載っている。涙香自身艶ダネ記事も書いた[32]が、これらの記事を書く軟派記者の不品行さには批判的でもあった。新聞界に入った当初、「堕落軟派記者連には、吉原邊の女郎屋から仕着の羽織などを毎年貰つて、それをば見せびらかして得意然たる人物ばかり」であったことに驚き、忠告して憎まれたこともあった[33]。涙香のこの姿勢は、後の『萬朝報』における傾向にも通じるものである。

『萬朝報』の創刊理念と経営戦略

1892 年、涙香は『都新聞』の引き止めを固辞して『萬朝報』を創刊した。その発刊の辞は次のように始まる。

> 萬朝報何が為めに発刊するや、他なし普通一般の多数民人に一目能く時勢を知るの便利を得せしめん為のみ、此の目的あるが為めに我社は勉めて其価を廉にし其紙を狭くし其文を平易にし且つ我社の組織を独立にせり[34]

萬朝報の読者は「普通一般の多数民人」と設定された。それは、高尚な漢文調の論説を難なく読みこなし、政治議論を日々交わす少数の大新聞読者ではない。しかし艶ダネで満足する小新聞読者とも異なる。家で一番学問ある者の読み物を平易にした新聞であれば、

---

[29] 涙香会編.1992.黒岩涙香.p9

[30] 岡安儀之. 2012. 『新聞記者』の誕生 -福地源一郎の自己認識を中心に.日本思想史研究(44).pp.48–67.

[31] 「絵入自由新聞」, 日本近代文学大事典

[32] 涙香と同時に在籍し萬朝報の社会欄も一時務めてていたのは、劇評や花柳界の記事を手掛けた右田寅彦である。三世柳亭種彦（高畠藍泉）に私淑し演劇改良や帝劇にも関わった。紅野謙介（2003）投機としての文学 ： 活字・懸賞・メディア.新曜社. p32.

[33] 涙香会. 1922. 黒岩涙香.扶桑社.p644

[34] 『萬朝報』1892 年 11 月 1 日「「萬朝報」発刊の辞」

「旦那の後は細君読み番頭読み小僧読み下女下男読み詰まる所一銭の価にて家内中皆益する」ことができる。これが「一家経済の秘伝」というのが涙香の主張であった[35]。

よって、これは特定の政党の支持基盤として集められる有権者でもなかった[36]。「此頃の新聞紙は「間夫が無くては勤まらぬ」と唱ふ売色遊女の如く」として政党機関紙を批判し、「普通一般の民人が真成の事実を知り公平の議論を聞」くための独立をその理念とした。

さらに、広告収入の比率は他紙に比べてかなり低く、業界初の広告倫理宣言まで行なっている[37]。この独立路線を保つには、読者数の維持拡大が極めて重要となる。ここで採用されたのが、硬軟取り混ぜた記事を薄利多売方式で提供する戦略であった。大新聞的な社説と小新聞的な娯楽記事をモザイク状に所狭しと並べ、各人が好みの記事を拾い読みできる紙面とした。『萬朝報』の名を広めた政治家への痛烈な攻撃も、娯楽記事を散りばめる独創的な企画も、広汎な読者という新しいパトロンを獲得し維持するためのバランス感覚のもとに展開されていた。

戯作の改良と読者の教化

涙香は日本における探偵小説の祖としても語られるが、その小説家としてのキャリアは戯作者のあからさまな勧善懲悪、編年体を改めるところに始まる。『絵入自由新聞』時代、探偵小説の筋を戯作者[38]に話して書かせてみたことがある。しかし戯作者の書き振りでは「最初から悪人、善人、盗賊と知れて了つて、読者を次へ次へと引く力が無い」。やむなく涙香が引き取って、最も面白く複雑な部分を先に載せ、「乱れた環の糸口を探るように、其の原因に遡って」書き始めた。またその際、英米の三文小説からプロットを器用に抜き取り、様々な名称、例えば登場人物「ヒリッパ」を「お璃巴」へと名付け直す。このように、海外小説の大まかな筋書きだけを採用し、翻案して日本の文脈の中に再構築する[39]のが涙香の書き方であった。この新聞に適した叙述方法は読者の反響を呼び、涙香は人気作家ともなった。その処女作が「法廷の美人」である。これは勿論売上にも貢献したが、新聞の発行停止に関する不平等な裁判への当てつけでもあった。裁判官の叔父の影響で以前から法律に関心を持っていた涙香は、新聞を使ってより多くの人に裁判が重大な仕組みだと知らしめる必要を感じたのである。

このようにして、涙香は自らの媒体をもって徐々に読者を「探偵」として育成していっ

---

[35] 番頭の前に細君があることにも涙香のジェンダー観が現れている。

[36] 憲政擁護運動、山本権兵衛内閣の打倒による第二次大隈重信内閣成立を支持したが、これは反体制派であることを好んだ読者には不評であった。

[37] 武利.1984.p.9

[38] 彩霞園柳香が書いたものが「二葉草」という小説であるが、これは打ち切りになった。

[39] 梶山秀雄. 2018. 「近代日本文学の牽引車としての探偵小説 ——黒岩涙香と翻案小説」. 島根大学外国語教育センタージャーナル 13: 17–26.

た。それは受動的な教育というよりも、能動的に真相を究明させる教化である。涙香は洋書からの知識の摂取と経営上の必要により、それまでの戯作者の作風を新聞に最適化させた。探偵小説のように少しずつヒントを与えて謎を解かせる手法は、日刊新聞を継続して購入させる目的にも適うものである。そしてまた、明治期の急激な法や慣習の変化に戸惑う人々に対し、真実を提示して導くことは涙香の道徳観にも則していた。

発刊して間もない『萬朝報』がスキャンダラスに報道したことで知られる相馬事件も、戯作者の手による「お家騒動」の改良と教化的側面を併せ持つものとして解釈可能である。精神病を患ったとされる旧中村藩主・相馬誠胤は、宮内庁への申し出の後、家族によって自宅の座敷牢に収容された。その後東京府癲狂院へ移されるが、そこに旧藩士の「忠臣」錦織剛清が登場する。1883 年に錦織剛清は、家督相続問題が絡んだ不当監禁の疑いをかけて裁判を起し、病院に侵入するなど混乱した展開を見せたのである。当時日本に流入したばかりの精神医学では医師の見解が定まらず、誠胤の死後は毒殺説まで浮上して死体の調査が行われた。なお、この事件は日本の精神病者監護法制定に一定の影響を与えている[40]。

この事件に対し、創刊して間もない『萬朝報』は、江戸っ子気質の読者[41]を意識し、最初から錦織剛清の肩を持つような構図で報道する[42]。この部分は戯作的であるが、一方で裁判の様子や医師の証言を丁寧に集め、あくまで事実報道をし続けてもいる。お家騒動という物語の真相を追う中で、読者は法制度や医学知識を同時に習得していくのである。

涙香の科学的思考法とそれによる読者の教化は、文学研究にも応用されている。例えば、涙香が 1912 年から婦人雑誌で発表した「小野小町論」は女性の品位向上を説くものでもあった[43]。そこで涙香は、小野小町を美人でありながらも品位の高さゆえ男を退けた「偉絶壮絶なる貞操の女神」として発見するのである。色好みの小野小町像、これは誤った伝説であると「科学的研究法」によって資料から詳らかにする。これと同時に、徳川時代の好色本は「猥りがましい書」として切り捨てられる。読者はこの手捌きを追体験することで、ふさわしい女性像を自ら発見することになるのである。

このように涙香は、西洋の知識を柔軟に摂取し、戯作者の扱ってきた大衆向けの読みものを新聞メディアに適合させていった。またこの際、西洋的発想広く一般の人々に向けて翻訳ではなく翻案し、同時に法制度を噛み砕いて読者を「真成の事実」へと向かわせている。この姿勢は、多岐にわたる涙香の活動に通底するひとつの特徴である。

---

[40] 西川薫. 2003.「相馬事件と精神病者監護法制定の関連：先行研究レビュー. 現代社会文化研究 26: 35–51.

[41] なお、『萬朝報』は他紙に比べ薄利であることから、地方の売捌店にとって手数料が安く扱う利益が少なかった。本社からの直接配送が主力の販売方法となり、結果的にも東京の読者が中心となった。

[42] 山本武利.1984.

[43] 黒岩涙香. 1913.小野小町論.朝報社.

涙香の思想的背景と新聞紙論

1860 年代生まれの涙香の世代は、漢籍文化の中で幼少期を過ごしながらも西洋の概念を次々に結びつけていく知的環境にあった。涙香が 1903 年に発表する『天人論』では、学問の基礎となっている漢学的教養に加え、スペンサーの名前が頻繁に登場するほか、ゲーテの親和力やヘッケルなどに強く影響を受けている様子がみられる。「今日の進歩せる科学は殆ど宇宙の万象と人生の一切とを知り悉したる者の如」く思われ、進化論は「迷霧を一掃」した。物心一如、汎神論、萬有理数、生命一體の向上主義、この全てが一元論として調和するが、人の感情や霊魂の問題は未だ究明できていない。よって、今後心霊学が思想の焦点となるとも論じている。フレデリック・マイヤーズによる『霊魂不滅論（Human Personality and Its Survival of Bodily Death）』は同年 1903 年に出版されているが、涙香はいち早くこれを取り入れて紹介している。学者になる道も検討していた涙香は、漢籍をベースにあらゆる情報を熱心に吸収した。そこには暦学者の祖父を持つ、黒岩家の歴史が揺蕩しているようにも見受けられる。

しかしなぜ涙香は新聞という手段を選んだのか。それは政治家や官僚らの管轄領域よりも、新聞によって作り出される均質で広大な空間にこそ新たな天下を見出した為である。「新聞紙論」(1912)では『大学』等の古典も参照され、儒学的な統治の論理から新聞観が語られている。涙香にとって新聞は理念上、他のどの手段より風俗を制し人心をも動かすことが出来る媒体であった。自らの新聞を正しくし、世界の隅々まで行き渡らせることが理想なのである。

> 新聞紙の勢力は世界の一切を包括して居る、大も小も新聞紙の勢力より逃れることは出来ぬ、昔しの言葉に正心、誠意、終身、斉家、治国、平天下と云ふが、此の六を総括して[44]居るのが新聞紙である。

また、その力の所以を次のように述べる。「事理を論議するに於て多く私心を挿入せず、少くとも社会先覚の意見を代表」する限りにおいて新聞は存続するという信念、これは涙香にとって「自明の理」であるという。そして以下のように続ける。「此点から云へば新聞紙は世間を支配すと雖も自個の生存を世間から支配されて居る、新聞紙の勢力が偉大であるけれども、『世間』なる者の勢力はさらに偉大である」。

涙香が新聞を売る活動は economy とも oikonomia とも翻訳し難い。これら用語を頭の中で翻案し、「旦那の後は細君読み番頭読み小僧読み下女下男」まで読むことが「一家経済の秘伝」である。こう紙面に掲げて遍く読者を拡大していくことが涙香なりの治世であった。涙香は自身の新聞活動によって、官僚や政治家よりも効果的に人心を教化すること

---

[44] 涙香の本名は黒岩周六である。奥(2014)によると「六合にあまねし」という意味で付けられたようである。『大学』八条目から格物致知を抜いて六とし、それを新聞の領域とする点は涙香独特の新聞観を表している。

ができると考えた。一方で、彼の統治範囲は購買者の気を引き続けることができる限りにおいて存在し、政府からの発行停止によって消失する可能性もあった。涙香にとって何より危険な思想とは、特定の政治思想ではなく言論の圧迫である。「危険思想の本源は思想に圧迫を加へる当局者の政策」なのだ。

またこれは、進化論的な論理によっても支えられている。政府による不当な言論の圧迫がなければ、世に即し、廉価で道徳的で、真実に近くあり続ける限りにおいて、新聞は「適者生存」するはずなのである。天下といっても、現実の『萬朝報』の発行部数は（都下第一となった日清戦争期後においても）約 9 万部に過ぎない。他紙との激しい競合や政府の発禁処分に常に脅かされ、いつ経営が傾いても不思議ではない状況にあった。混沌として未成熟な市場環境において、中心・家父長から文明を広げる華夷秩序的イメージと、市場で進化し生き残る、優れた種としての『萬朝報』の姿が奇妙に重なる。

風俗の矯正と性的身体の規制

涙香は「発刊の辞」において、家内を「旦那>細君>番頭>小僧>下女＞下男」という順番で記述している。番頭よりも細君が、下男よりも下女が先に並ぶことは興味深く、涙香の男女平等観が現れている。一方で、政党と癒着する新聞を「遊色売女」と比喩していることからも、遊女や妾という正妻以外の立場に対しては辛辣な姿勢である。「小野小町論」(1912)においても、既に確認したように女性の貞淑を殊更に強調している。

一夫一婦制の奨励や性的堕落の取締という方針は、涙香の言論上の活動において基本的に一貫した方針である。黒岩涙香に関する書籍ではしばしば、青年時代の友人との吉原通いや、妻や姑との関係不良、再婚者が芸者であるという私生活のエピソードが記述される。また、非常に多趣味な人物であることから、遊芸に長けた江戸情緒を理解する人物として捉えられる場合がある。これも涙香の一側面であるが、公に向けての言説や新聞紙の活動に注目した場合、性の乱れを「堕落」として取り締まる方向性も持ち合わせていることが分かる。『萬朝報』の有名なスキャンダル記事の一つである 1899 年「蓄妾の実例」[45]やその翌年「私生児の父」「芸妓の弗箱」といった企画では、政治家らの妾に関する事実や証言を集めて住所まで公開し、彼女らが如何に厳しい境遇にあり、身を正すべき公の人間がどれほど醜悪かを次々と暴露した[46]。上流階級の醜聞記事を出して読者の気を引くことによって、営業上の利益が確保されていたのは事実である。だがそれと同時に、法に矛盾して実質上の一夫多妻制を保持する高位高官の蓄妾の存在をあくまで「事実報道」にす

---

[45] 黒岩涙香.1992.弊風一斑 蓄妾の実例 社会思想社 現代教養文庫.pp.7-186

[46] 日露戦争期、宮武外骨も『滑』において伊藤博文の女好きを風刺する。しかしそれは庶民が血を流す中で女に垂涎する政治家は暗殺されて構わない、という庶民感情の代弁であり、日本の婚姻制度の矛盾を指摘する涙香とはやや別の角度からの主張である。野村美和.2022.「下から」歴史像を再考する：全体性構築のための東アジア近現代史.有志舎.pp347-368.

ることにより、これを風紀問題として問題視して世に問いかけてもいる。これは 1899 年の改正戸籍法により、妾として戸籍に登載されていた女性の続柄が抹消され、続柄がない状態で家に留まっている状態の指摘である[47]。

ここで性に関して、旧弊の習慣を問題視する明治期の言説がどのようなものであったかを確認しておく。渋谷(2013)は明治期の「性的身体の使用禁止言説」を分析している。それによれば、日本における近代教育制度の拡充による男子学生への性的身体の規制は 1890 年代ごろからとされる[48]が、1880 年代には既に、寄宿舎にいる書生が芸娼妓と遊ぶことを禁じる言説や品行を正そうとする言説が見られる。渋谷は福沢諭吉「品行論」(1885)、木下廣次「籠城演説」(1888)、徳富蘇峰「非恋愛」(1891)の分析を通じ、1880〜90 年代において「立身出世にとって性的身体の使用は障害物になりうるという発想」が現れたことを示している。発言者の立場や誰に向けての文章かによって、言説の根拠は様々だが、福沢諭吉はその緒言から「今の世界文明の程度」において「人の本心の非を正さん」と述べ、男子の畜妾や芸娼妓遊びを陋習として糾弾している[49]。さらに、教育現場ではこれが立身出世の論理と結びついて警告されるようになっていくのである。第一高等中学へ 1887 年に入学した堺利彦も寄宿舎の友人から吉原通いを教わった[50]ように、この時期にも寄宿や下宿中に遊郭を覚えることは書生文化に浸透していた。またこれは同時に、知識人や教育者の中で問題視されつつある行動でもあった。このことを踏まえると、黒岩涙香は堺利彦より 9 歳年上であり、書生時代に遊里に出かけたエピソードが残っていても、当時の文化としては珍しいことではない。小新聞に所属していたことからも、花柳界や通俗文化に親しむ環境にあった。しかし、これは涙香が言論活動において、花柳界を称揚する意図があったことを意味しない。むしろ、20 世紀に近づくにつれ『萬朝報』の傾向は、遊女や妾を社会問題として取り扱い、家庭内（ここでは「家」より「home」に近い）に引き入れようとした。花柳界の堕落を排除し、一組の夫婦が支え合う温かな家庭が理想とされる[51]。

大阪英語学校時代の涙香のものと推定されている投書に「手淫ノ害」というものがある[52]。「在大坂英語学校 近藤堅三」名義[53]のこの投書は、米国名医による「フヒロソヒー、ヲフ、マリジ」の一部を「局所ノ兆候 男根ノ部」「一般ノ兆候第一 筋、呼吸器、循環器、滋養器等ニ関スル部」「一般ノ兆候第二 意識ニ関スル部」に分けて報告している。これは「学校寄宿舎及私塾等小壮ノ男子群居スル地」で演説も行い、その内容をかいつまんで投

---

[47] 所由美(도꼬로 유미)(Tokoro, Yumi). 2011. 明治時代の「妾の法的地位」について.일본어문학 53: 467–92.

[48] 渋谷知美. 2013. 立身出世と下半身 : 男子学生の性的身体の管理の歴史.洛北出版.

[49] 福沢諭吉. 1885.品行論.石川半次郎.

[50] 渋谷前掲 p.156（堺利彦. 1982. 堺利彦・山川均.日本人の自伝(9).平凡社.）

[51] 『萬朝報』周辺は女性論に関して『明六雑誌』の傾向を継いでいると考える。森有礼 1874 年「蓄妾論」から論じるべきであろうが、ここでは省略する。

[52] 奥武則. 2014.『黒岩大』とは誰なのか :『涙香伝』のために. 社会志林 60 (4)pp.71–95.

[53] 高松敏男.1981.ニーチェから日本近代文学へ.p156 より重用

書したものである。筆者としては、この「近藤堅三」を黒岩涙香ではなく、大阪英語学校の教育者であると推測する。しかし、少なくとも涙香が大坂英語学校の寄宿舎にいた時期（1879 年 1 月）に行われていた演説内容であることは確かである。内容はヴィクトリア朝らしく、自慰行為は「self-pollution」と呼ばれる。涙香はこのような演説がなされる大阪英語学校に学び、洋書を日々読み耽っていたことからも、明治前期の日本において西洋的な、それも 19C 的な厳格な男女観をかなり先取って認識していたと考えられる。なお涙香が大阪英語学校に所属していた時期、コレラの大流行により衛生行政が強化された。これも廃娼運動に影響している。よって涙香は次のように語っている。

> 一夫一婦制を正しき人間の道と信じて居るもので、自ら信じ自ら行ひ、其信じたる事に依つて社会を矯正しやうとする許りでありまして、無闇に人を傷け人を罵りさへすれば好いと云ふやうな主意では決して無い[54]

ジャーナリズムによる風教に奔走した結果、涙香は「蝮の周六」との悪評も得てきた。このやり方に眉を顰める人もあったが、これは無闇な誹謗中傷ではなく社会の矯正としての実践なのである。また同時に新進気鋭の硬派な論客を招くことにより、進歩的青年層に多くの愛読者を得ることにも成功している[55]。当時にして珍しく英字欄を設けておりこれも学生に役立った[56]。こうして『萬朝報』は日露戦争直前には、真面目な学生新聞といった評判を得るようになっていくのである。

「理想団」と非戦論者

『萬朝報』の関係者として最も著名なのは内村鑑三・幸徳秋水・堺利彦であろう。これは涙香と日露戦争を巡って立場が分かれた 3 名でもある。内村鑑三はキリスト教的人道主義から、幸徳秋水と堺利彦は社会主義の立場から非戦論を貫いて退社した。これが 1903 年 10 月のことである。その後幸徳と堺は平民社を設立し、ここで『平民新聞』が発刊された。『共産党宣言』が初めて全訳されるのもこの平民社においてであり、多くの初期社会主義者のドイツ語学習が始まるのもこの平民社ができて以降である。『萬朝報』の青年読者は『平民新聞』にも移動した。

非戦論者の 3 名は朝報社を去ったが、この退社は涙香との関係の断絶を意味したものではない。彼らは「理想団」というコミュニティを通じ、日露戦争期も関係が維持されていた。これは自己の修身から社会を救済・改良することを目標として 1901 年に創設された

---

[54] 涙香会.p15

[55] 山本武利.1984.p24

[56] 松村守義、イーストレート、斯波貞吉、内村鑑三らがこれを担当した。佐藤林平. 1979.「黒岩涙香と万朝報」.日本英学史学会英学史研究, no. 12: p129-135.

ものである。発起人は８名の朝報社員[57]であったが、内村鑑三による呼びかけの力が大きかったようだ。評議員には記者、弁護士、学者などがあり[58]、細かいルールは決定されずにサロンのような形式から始まった。

『萬朝報』や「理想団」のメンバーはのちに社会主義者やキリスト教者へとなるものが多かったとはいえ、それは『萬朝報』がこれらの思想に基づいて運用されていたことを意味しない。むしろ西周によって初めてもたらされた「理想」の語[59]に表現されるような、抽象的で未分化である言葉の方が、その共通性を表しているように思われる。例えば、堺利彦も『萬朝報』在籍時において常に純然たる社会主義者であったわけではない。堺は退社後の 1904 年、「余は如何にして社会主義者となりし乎」を『平民新聞』上で発表する。そこでは過去の思想遍歴が並べられ、儒教思想、自由民権思想、忠君愛国思想、耶蘇教の思想、進化論の思想、功利主義などが絡み合い「大混雑が生じて、常に不安の念を抱いていた」ことが明かされる[60]。

『萬朝報』ないし理想団において、彼ら共通の思想は「儒学的な修身とあらゆる西洋思想の吸収による政府外からの社会改良」と表現する以上のことが難しい。またその心性として、理想化された「家庭」があったということが指摘されることもある[61]。ただ、その構成員に「妾」「売女」がいないことは共通していようが、それ以上に共通の「家」のイメージがあったかは疑わしい。エンゲルス的家族論、福沢諭吉のような近代的家族論、またその前提に、家庭内から親愛の情を広めていく儒学的家の観念が混在していた。ただ、衛生行政の強化や西洋思想の流入により、花柳界は堕落として改良の対象とされた[62]。

ともかくとして、執筆者たちの文章を修正せずに、そのまま紙面へ掲載することが涙香の基本方針である。よって、日露戦争に差し掛かる頃には非戦論が多く掲載されていたが、涙香本人は絶対的な反戦の意思によってこれを行なっていたというより、政治や外交、あるいは世間一般の状況に則して問題点を指摘し、極力長く非戦論者にも書かせる紙面を用意するという立場にあった。

「朝報社にもし光明ありとせば内村幸徳堺三君の如きは其の中心なり」といい、涙香は

---

[57] 内村鑑三、黒岩周六、山県五十雄、幸徳伝次郎、円城寺清、天城安吉、堺利彦、斯波貞吉

[58] 有山輝雄. 1979. 「理想団の研究-1」. 桃山学院大学社会学論集 = St. Andrew's University sociological review 13 (1): p37-64.

[59] 納富信留. 2013. 「理想」とは何か―プラトンと近代日本」. 国士舘哲学 17.

[60] 杉原四郎. 1971.川口武彦編『堺利彦全集』(全 6 巻 1970～71 年).甲南経済学論集 12 (3): 96–105.

[61] 小正路淑泰. 2016. 堺利彦：初期社会主義の思想圏. 東京: 論創社.

[62] 矯風会など、女性達の廃娼運動も勿論存在した。だが 1890 年 7 月、集会及政社法により女性の政治活動が全面的に禁じられてもいる。佐々城豊寿と内村鑑三が互いに批判し合うなど、理想団出身者とも交流がある。林葉子.2007.女たち／男たちの廃娼運動：日本における性の近代化とジェンダー.

中心記者の退社を惜しんだ。非戦論の掲載を続けても経営は困難で、開戦論に転じても記者と読者を手放す、この朝報社の立場も苦しいものであった。『萬朝報』の方針は戦争報道の拡充が難しく、独自情報を得ながら、狭い紙面で戦況を伝えることは至難の業である。

1903 年年末頃には、読者獲得のため「寶探し」や「米しらべ」キャンペーンが実施されている。各地に債権などのお宝を隠しておき、紙上にこのヒントを載せて読者に探させたり、一升に米は何粒あるかを調べさせたりするものであった。これに対し、幸徳秋水は「數十數百人が 1 枚の債券を求めて其處を堀返し此處を堀返すのは實に一幅の滑稽畫」であり「社会の堕落」を招くとして批判した。涙香は次のように反論している。「営業上の競争の必要よりやって居るのである、現時新聞の競争は殆ど極度に達し、中には言ふに忍びざる不徳の手段を弄するのもある、此間に立って自己の生存を保つが爲には有力なる競争を爲さねばならぬ、此点に於ては、予は競争を非とする社會主義の人々とは、根底から其意見を異にしている」[63]。実際、涙香は読者を熱中させるためだけが投書やキャンペーンを打つ他紙を過去に批判してもいた。それに対し、堺利彦は「若し平民新聞にして、多少の價値あり、社會に貢献する所があるならば、社會は予等を養って呉れるであらう、社會が養って呉れなくなれば、夫は新聞に價値がない需用がないからだと覺悟して慎しんで廃刊す」と[64]、涙香の如く適者生存の論理で反論している。

「寶探し」キャンペーンと民謡蒐集

しかし、この「寶探し」は意外なところで参照されることになる。『帝国文学』において「民謡」概念を決定づける議論のひとつとして、志田義秀による 1906 年の「日本民謡概論」がある。そこではゲーテやハイネらが自国の民謡研究の末に国詩の創出を成功させたことが強調され[65]、次のように続けられる。

> 本誌の読者は記憶されるであらう。去年の本誌一月号に於いて、「文芸雑談」の覆面の某大家が「馬子唄、舟唄、子守唄、糸引唄なぞにまだまだ掘り出し物が、しこたまあるかもしれません。萬朝報の宝探しの流儀で、ちょと掘り返しに取りかかつては、如何のものでござりませう。ゲーテでも、ハイネでも、此民の声を聞き流しにしなかつた為に、詠み出でる歌に、一種言ふべからざる妙味があるやうに参りました」と宣うたことを[66]（傍点筆者）

---

[63] 有山輝雄. 1980. 「理想団の研究［II］」. 桃山学院大学社会学論集 13 (2): 315–46.引用部重用

[64] 前注同

[65] 志田義秀はこの議論中に「民謡」の語が「俗謡」や「俚謡」などと混同しないよう注意を促し、Volkslied＝民謡の対応関係を示して、訳語の混乱を収めている。

[66]志田義秀「日本民謡概論」1906 年『帝国文学』12-2

国家による民謡蒐集がプロジェクトとして推進される際、民謡を「萬朝報の宝探しの流儀で」掘り出そうとの議論がなされている。文部省は「民謡」を Volkslied の訳語として使用し、ドイツのヘルダーやゲーテ、ハイネの民謡蒐集を参照して民謡蒐集のプロジェクトを開始した。しかし、その企図するところには、涙香が読者に対して要求したような、些細なヒントを集め、法や論理に基づいてそれを整理して真理を発見する、という世界認識の態度の変容が前提となっているのではないだろうか。

3-2　俚謡正調運動

次に示すのは、旅順攻略戦最中の 1904 年 11 月『萬朝報』紙上に掲示された公告である。全文をここに引用する。

正調の俚謡を募る

昔より日本に三大詩形あり、其一は五七五、七七の三十一文字式なり之を和歌と云ふ、共二は五七五の十七文字式なり之を俳句と云ふ、共三は七七七五の二十六文字式なり、之を関東にては「ドゞ一」と言ひ関西にては「ヨシ此」と云ふ、猶ほ各地各様の称呼あるべし、其の何の意たるを知らざるも、要するに日本に固有なる、且最も普及せる俚謡なり。

右のうち三十一文字式と十七文字式とは上下一般に行はるれど、独り二十六文字式に至りては土君子之を顧みず、我が朝報の如きもに通俗文芸に相当の地歩を得せしめんが為めに和歌俳句より下りて狂歌、狂句、謎々、語呂合せをまで募集して発表せるも独り「ドゞ一」のみは斥け来れり、朝報発兌以来四千号に及び一回もドゞ一なる者を紙上に掲げざるは諸君の知りて而して或は怪み或は激賞する所なり。何故に「ドゞ一」は斯の如く貶せらるゝや、他無し、近来其の調の堕落して単に遊女治郎の心意気を述るか、然らざるも卑猥取るに足らざるが如きに至りたればなり。

然れども俚謡の本来は斯の如き者に非ず、俚謡は平民詩なり、以て民俗を知る可く、時代と社会との風尚を察す可し、孔子の選したる詩三百、経典として三千載に垂るゝも実は当時の俚謡のみ、呼、ドゞ一は俚謡の末にして俚謡を汚辱するものか。近く我が潮来節に至るも猶ほ聞く可きものあり、其以前は和歌の優美と俳句の簡雅との外に大和民族の再適なる気風より出でゝ或は天地の美を詠じ、或は人情の妙を講ひ、聞く者をして一唱三嘆せしむるも有りき、今にして之を俚謡本来の正調に復らしむるは、縦し風数を益するほどの力無しとするも、必ずしも無用の事にあらじ。理品は和歌にも俳句にも優る点なきに非ず、「ウタ」と云ふ者の本来は発声して「ウタウ」に在り、俳句は短くして謡ふに便ならず、和歌は特別の作曲を要す（「君が代」の如く）、独り俚謡は各地到る處に古来謡ひ来れる種々の曲あり、得るに随ひて如何やうにも謡ふ可きなり、是れ大に「ウタ」の本旨を得たる者に非ずや。

以上の意味に於て、朝報は今日より「俚謡正調」と題して二十六文字式の「ウタ」を募る、厳重に精選して、眞に俚謡の正調に叶へる者を紙上に掲げんとす、賛成の方々は其作歌を郵便はがきに認め「俚謡正調選者」に宛て贈られよ、精選の結果紙上に掲ぐ可しと認むる者あらば、毎一首に対し金一円の報酬を贈る。(『萬朝報』1904.11.28)

涙香は、日本の三大詩形として三十一文字（和歌)、十七文字（俳句)、そして二十六文字（都々逸）を挙げる。最後の二十六文字は「関東にてはドゞ一と言ひ関西にてはヨシ此と云ふ」ものだが、「近来[67]其の調の堕落して単に遊女治郎の心意気を述るか、然らざるも卑猥取るに足らざるが如き」に至ったとして、『萬朝報』はこれまで意図的に掲載を避けてきたと述べている。しかし、涙香はここで都々逸を完全に否定するのではない。むしろ「俚謡は平民詩なり、以て民俗を知る可く、時代と社会との風尚を察す可し」として、その可能性を強調する。その典拠として持ち出されるのが『詩経』の伝統[68]である。「孔子の選したる詩三百、経典として三千載に垂るゝも実は当時の俚謡のみ」と、民の歌を選び取って教化に用いるという儒学的発想が都々逸に応用される。

花柳界の改良としての「俚謡正調運動」

すでに見たように、『萬朝報』や理想団において、家庭改良や風俗改良、芸娼妓の廃止は 1900 年前後から大きな政治的イシューであった。このことから、花柳界の歌としてのイメージの強い都々逸を「俚謡正調」と名付け直すことにより、風俗改良を兼ねていた可能性があるといえる。第 2 章で確認したように、都々逸は地方の節が花柳界へと集まり、洗練されることによって生まれた流行歌のジャンルである。これを「潮来出島の真菰の中で菖蒲咲くとはしおらしや」といった純朴な歌の状態に戻そうという発想は、都々逸の発生の系譜にも『詩経』にも則している。

なお、ここで注意を要するのは、花柳界から逆に地方へと流れていった、「卑猥」とされる内容を含む唄も地方に多く存在していたということである。花柳界の音楽は容易に地方の村にも伝播し、人々が日常的に歌っていた。実際に文部省によって民謡蒐集が行われた成果は『俚謡集』として成立したが、「一般的なるものと卑猥なるもの」は省略し、削除して編纂されている[69]。この削除された一般的で卑猥なものの中に都々逸が多分に含まれていたことは容易に想像ができる。柳田國男は 1930 年代においても次のようなことを報告してい

---

[67] この時期において治乱興亡の世界観と徳川時代がいかに接続されているのかについては今後の研究を要する。

[68] 孔子が詩を整理したこと自体は『史記』孔子世家に記述されている。(古者詩三千余篇、及至孔子、去其重、取可施於礼義、上采契後稷、中述殷周之盛、 至幽歴之缺、始於衽席、故曰、關雎之乱以為風始、鹿鳴為小雅始、文王為大雅始、清廟為頌始。三百五篇孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。礼楽自此可得而述、以備王道、成六芸)

[69] 坪井前掲.pp.265-266

る[70]。

最近に諏訪の山浦地方で、土地の老人老女の覚えていた歌を数百首、小池安右衛門君が採集したことがある。面白いことにはその歌の半数以上が、嶺を隔てた長久保の新町あたりで、妓女の歌っていた都々逸の文句であった。村の娘どもが真似てそのようなものを歌うようだったら、当然にその心意気も変ってきたであろう。黙ってそれを聴いていたにしても、やっぱり風儀は悪くならずにいなかったろう。いずれにしたところで彼らみずからの情と才藻とは、見いだされまた選択せられる折を失ってしまったのである。いわゆる仇し契りの結ばれやすかったのも止むを得ない。ただ幸いにしてそういう状態は、日本では遅く始まりまた早く過ぎ去った。そうしてこの次にはいかなる目標によって、互いの心を試みるのがよいかを、今はまだ決し兼ねているのである。

また、卑猥な歌詞の排除は、新民謡運動とも関連する。大正期において、富岡製糸場や須坂の山丸工場では卑猥な唄を口ずさむ女工たちが問題視されることとなった。これを教育的に作り変えることが考えられ、新民謡運動の中心人物である北原白秋や野口雨情らによる女工音楽が作詞された事例も存在する。さらにこれは、花柳界にも流通し御座敷唄としてもまた流行した[71]。レコードやラジオなど音声メディアの発達が音楽の伝播性を高め、加速させた側面は勿論あるだろう。しかし、このように大正期においても花柳界が歌の流通経路として強力に機能していることは、第 2 章で確認した都々逸の変遷と照らしてみても、これが「日本に固有なる、且最も普及せる俚謡なり」と形容されたことにもある程度根拠が存在した可能性が高い。そして、そこに「大和民族」の統一性を見出すということもある程度実感に即していたのであろう[72]。

よって、花柳界から伝播する卑猥な歌詞を改良しようという発想は、日露戦争期にナショナリズムを煽るというシンプルな動機のみではなく、そこに異なる位相が存在していると考えられる。むしろ、「単に遊女治郎の心意気を述るか、然らざるも卑猥取るに足らざるが如き」都々逸をひとつの文芸コーナーとして取り入れることは従来の『萬朝報』の方針に反する側面があり、戦争期に「平民詩」として勇敢な歌と替えない限り、それを文芸として掲載しにくかったのではないだろうか。よって「土君子之を顧みず、我が朝報の如きもに通俗文芸に相当の地歩を得せしめんが為めに和歌俳句より下りて狂歌、狂句、謎々、語呂合せをまで募集して発表せるも独り「ドゞ一」のみは斥け来れり」という文章が可能となる。

---

70 柳田国男. 2009.木綿以前の事. 改版.岩波書店.（底本「短歌研究」1934 年 2 月「凡人文芸」）

71 竹内勉. 1981. 民謡：その発生と変遷.角川書店.

72 涙香は坪井正五郎の影響下にもあった。

Volksliedと詩経

また、ここで注目すべきは、涙香は儒学をベースとしながらも、英米仏独の多岐にわたる知識を広く渉猟しつつ、独自に「平民詩」としての「俚謡」の姿を発見している点である。

『帝国文学』におけるVolksliedに関する議論を改めて確認しておくと、『帝国文学』周辺において1890年代後半から1900年においてはVolksliied概念の解釈に混乱が生じており、「Volkslied」の翻訳案は他に「俗謡」「俚謡」「国風俚歌」などと当時乱立していた。この時点では「Volkslied」が地方性や自然性を帯びた田植え唄よりも、より身近な都市の流行歌や花柳界の歌がイメージと結びつき、都々逸風の新体詩の作詞に取り組むものもいた。また、当時これに対して顰蹙の声も寄せられる様子が寄せられており、品田(2001)も複数の資料でこれを紹介している。

> バイロンやシルレルの作を愛吟した大学生が昨夜から変にこじつけて吉原へ俗謡研究に出馬し（.....）夫れは夫れは驚いたものだ。(「消夏法」（分担執筆）『日本人』一一八、一九〇〇年七月。該当箇所は署名「淡水生」品田p.198より重用）

この議論の混乱を落ち着けたのは、上田敏による1904年の民謡論であるが、上田敏は花柳界の音楽の排除を徹底するように注意を促しつつ民謡概念を定義づけている。3-1にて確認したように、民謡概念を日本が受容し始める1880年代と同時期に、学生が花柳界へ向かうことや蓄妾に対する問題意識が高まっていた。このことを併せて考えると、民謡概念の受容と近代教育制度の拡充による男子学生への性的身体の規制、旧弊取締などの議論が同時期に行われていたために、民謡概念の定義づけがなされる際、民謡がより地方にあるもの、それも農村や漁村の労作歌などに限定して規定される傾向を強めたとも考えうる。このような『帝国文学』上の議論を経たのちになされた、文部省による民謡蒐集事業は、方言調査と類似のプロセスをとり、その蒐集範囲が行政単位に沿って実行された[73]。

一方で、涙香が俚謡正調を計画したのは日露戦争期以前、1898年ごろだと思われる[74]。このとき、都々逸風の新体詩創作が試みられたり、国民的音楽や国民詩に関する議論が盛り上がっていたことからも、涙香がこれらの議論に影響を受けていた可能性もある。また、直接『帝国文学』の議論に触れていなかったとしても、ゲーテに英語で触れ、国内外の様々の議論を追っていた涙香であれば、ドイツ・ロマン主義的とされる発想にも影響を受けていたと考えられる。

よって、涙香の「俚謡正調」と『帝国文学』における「民謡」概念の最大の違いは、そ

---

[73] 長尾洋子. 2019. 越中おわら風の盆の空間誌 : <うたの町>からみた近代. 京都: ミネルヴァ書房.

[74] 第2章で確認した通り、俚謡正調欄の選者を断った金升が『萬朝報』を退社したのが1898年である。日清戦争期もうたの募集自体は行ったが、二十六字と限定されていない。

の「民の声」の収集プロセスや、その前提とされる統治領域、統治が広がっていくイメージの差であると考えられる。俚謡正調運動においては、明確な行政単位を持たず、儒学的な発想形態が用いられる。中央から地方へ読者を広げ、人心の改良を進めていくというイメージに基づいて「俚謡正調」欄が設けられた。一方、『帝国文学』における「民謡」概念の規定は、方言調査等行政上の必要とともに調査の必要が提唱されている。よって、行政単位に沿ってより地方性が強調され、地方のイメージの固定化につながるようになったと考えられる。

読者の体験としての俚謡正調

最後にこれは、読者にとっていかなる体験であろうか。涙香は「二十六字」という法を読者に与える。この際「俚謡正調」と名づけ直すことにより、「都々逸」の語に付着した堕落、花柳界の要素は洗い落とされる。大量の投書の中から厳重に精選し、最も「正調に叶へる者」が発表される過程で正しい詩とそうでない詩が区別されていくのである。これは応募者にとって、自分の詩が「正調」なのかどうか、掲載され一円を獲得するには自分の何が足りなかったのか、反省しながらまた次回投稿するという体験となる。この仕組みは、読者自身に「正調」を発見させる仕掛けとしても機能し始め、本来の正調を探す過程において、「大和民族の再適なる気風」や天地の美、人情の妙が遡行的に発見されるのだ。3-1 で見た通り、涙香は『萬朝報』を通じて読者へヒントと法則を与え、真理の探究を促してきた。「俚謡正調」も涙香のこの読者の啓蒙のひとつとして位置づけられるだろう。しかし、これは既に存在する都々逸を娯楽としていた人にとっては、奇異にも思われる企画であった。『團團珍聞』上には、俚謡正調運動に否定的な投書[75]もいくつか掲載されている。

> 兎や角と理窟を附くるの要は頓と認められんのではあるまいか、言稍や極端の謗りを免れないが、情歌なるものは何もそんなに文法上や、或るは意義上の要素を具備せざるなどゝ鹿爪らしく云ふには及ぶまいと思はれる（略）忌憚なく云はしむれば、如何にも無粋に、如何にも理窟ぽく又如何にも眞面目に少しも面白みがないかの様に思はれる、なる程文学思想豊富なるお方は正調として譽むるかは知れんが、元來情歌なるものは俗謠であつて、其盛なる所以のものは唄ふに容易に又何人にも解し易いからである（「萬朝報の俚謡正調を読みて」『團團珍聞』）

単なる俗謡、都々逸をこのように名付け直し称揚するのは「文学思想豊富なるお方」にはいいかもしれないが、いかにも「理屈っぽく真面目」である。戯作者の金升率いる都々逸連には、無粋なことに思われただろう。だが、都々逸の改良は明治 30 年代に始まった

---

[75] 『團團珍聞』(1553),珍聞館,團團珍聞社 ,1905-08-13. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/11211073 (参照 2025-01-28)

ことではない。明治 10 年代後半から 20 年代初頭にかけて「改良」自体が社会的現象であった。『團團珍聞』には過去こんな投書もある。

〇当世流行改良競
明けまして目出たう時に諸君はたびたび書かるる彼改良の種類を集めて見ましたから御覧下さい
衣服改良　飲食改良　家屋改良　教育改良　文字改良　言語改良　小説改良　宗教改良
学校改良　風俗改良　新聞改良　条例改良　婦人改良　束髪改良　帳簿改良　官吏改良
演劇改良　角力改良　講談改良　運動改良　機械改良　会社改良　薬局改良　市区改良
公園改良　道路改良　木履改良　湯屋改良　旅舎改良　妓楼改良　鳴物改良　塵溜改良
先雑と此なものでゲス併し此後またまた出て来たら改良しませう「テイテイまだ是に辻便所の改良が無いゼ「ハハア是で話も奇麗イヤ汚く落ちた哩ツ
（『團團珍聞』631 号 1888 年 1 月 14 日）

そんな中、仮名垣魯文らはかつて「改良都々逸評集自由思想」という企画も打ち出していた[76]。ここでも「隆達節の古調から」その起源を述べたのち、「自由思想」と題して「彼猥褻の姿を一洗の下心なり」といって都々逸を募集している。涙香はこの自由民権運動から受け継がれた小新聞での格闘の歴史さらに洗練させ、人心の改良まで成功させたに過ぎない。「俚謡正調」の同人誌はこの後、帝国的規模で広がりをみせることになる[77]

[76] 藤井美橘 編 ほか『改良都々逸評集自由思想』,金松堂,明 20.5. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1219741 (参照 2025-01-31)
[77]嚴仁卿. 2015.「日本伝統文芸とモダン京城の出会い :朝鮮半島における『都々逸』ジャンルの展開を中心として. 跨境 : 日本語文学研究 2.pp. 79–94.

第 4 章　結論

本研究は、明治後期における「民謡」概念の受容過程において、『萬朝報』紙上で展開された「俚謡正調」欄に着目し、その思想的背景と実践の意義を明らかにするものである。明治後期の国民文学運動において、Volkslied (Folksong) の翻訳語として「民謡」概念が受容される過程は、これまでドイツ・ロマン主義の影響を中心に論じられてきた。しかし本研究は、この受容過程において、儒学的な民謡観との混淆や、都々逸や花柳界、性的堕落の改良という課題も介在していたことを指摘する。第 1 章では、民謡概念の受容過程における、Volkslied の翻訳語としての民謡概念と儒学的発想による民謡観の混乱を指摘し、俚謡正調運動をその過程の複雑性を示す対象として位置付けた。第 2 章では、都々逸が地方の節から花柳界、そして文芸化する過程を記述し、自由民権運動の過程で小新聞上に新たなポジションを獲得したことを指摘した。第 3 章では、『萬朝報』のメディア実践を黒岩涙香の新聞観などから記述し、その延長線上に俚謡正調運動があることを示した。自由民権運動期の小新聞における実践を継承しつつ、涙香は読者に探偵的な論理性や科学性、法知識や新しいマナーを身につけることを要求した。これは学校教育ではなく、新聞による漢学に基づいた独自の教化実践である。俚謡正調運動は、この実践の延長線上に位置づけられる。都々逸という通俗的な娯楽を「平民詩」として再定義し、より高次の文化へと導こうとした過程で依拠されたのは、ドイツ・ロマン主義的な民謡観というよりも、むしろ『詩経』的な教化の論理であった。

これは、文部省による民謡蒐集と、一部重なりながらも違う位相を持ちながら在来の詩歌を蒐集した、文部省の民謡蒐集を先取るものであった。またそこで、民謡概念の成立において都々逸や花柳界の改良が遠因として働いていることを明らかにした。

安手のナショナリズムを煽るもの、もしくは商業的な戦略の一部とする見方がなされてきたこの「俚謡正調」欄だが、本研究はこの見方を否定しない。しかし、自由民権運動から出発した黒岩涙香の立場において、日露戦争期におけるこの実践は「平民」と「国民」の姿が限りなく漸近した結果という解釈が可能なのではないだろうか。俚謡正調と名付けられた二十六字は、日露戦争期においては「国民詩」となり、武士の情けや息子を戦地に送る母の心情が詠まれる。しかし平時にも『萬朝報』は発行し続けられ、そこでは日常生活における情緒や自然の美しさを謳う、ただし花柳界の要素が排除された「平民詩」となるのである。

第 5 章　参考文献

一次資料

萬朝報刊行会. 1892. 萬朝報.復刻版 / 萬朝報刊行会編.日本図書センター.
涙香会. 1922. 黒岩涙香.扶桑社.
黒岩涙香. 1913.小野小町論.朝報社.
黒岩涙香.1992.弊風一斑 蓄妾の実例 社会思想社 現代教養文庫.
志田義秀「日本民謡概論」1906 年『帝国文学』12-2
福沢諭吉. 1885.品行論.石川半次郎.
堺利彦. 1982. 堺利彦・山川均.日本人の自伝(9).平凡社.
柳田国男. 2009.木綿以前の事. 改版.岩波書店.
鴬亭金升. 1961. 鴬亭金升日記.演劇出版社.

二次資料

品田悦一. 2001. 万葉集の発明 : 国民国家と文化装置としての古典.新曜社.
坪井秀人. 2006. 感覚の近代 : 声・身体・表象.名古屋大学出版会.
渡辺裕. 2013. サウンドとメディアの文化資源学 : 境界線上の音楽.春秋社.
Groemer Gerald. 1995. 幕末のはやり唄:「口説節と都々逸節の新研究」.名著出版.
西沢爽.1990. 日本近代歌謡の実証的研究.桜楓社.
高松敏男.1981.ニーチェから日本近代文学へ. 幻想社.
野村美和. 2022.「下から」歴史像を再考する : 全体性構築のための東アジア近現代史.有志舎.
紅野謙介.2003.投機としての文学 : 活字・懸賞・メディア.新曜社.
竹内勉. 1981. 民謡 : その発生と変遷. 東京: 角川書店.
小正路淑泰. 2016. 堺利彦 : 初期社会主義の思想圏. 東京: 論創社.
渋谷知美. 2013. 立身出世と下半身 : 男子学生の性的身体の管理の歴史.洛北出版.
山本武利. 1984.「萬朝報」の発展と衰退:「萬朝報」解題・解説.日本図書センター.

城佳世. 2020.日本民謡の概念の変遷 : 国文学・民俗学・音楽学を中心に.九州女子大学紀要 57,1.pp.57–67.
鈴木貞美.2011.民謡の収集をめぐって―概念史研究の立場から.『近代東アジアにおける鍵概念―民族、国家、民族主義』中山大学・国際日本文化研究センター共催国際シンポジウム報告書.国際日本文化研究センター.
임경화. 2010.민족'의 소리에서 '제국'의 소리로 - 민요 수집으로 본 근대 일본의 민요 개념사. *Journal of Japanese Studies* (44):5–27.
齋藤桂. 2012.黎明期の新民謡 ――「俚謡」と「民謡」をめぐって.日本伝統音楽研究 9: 43-55.
山本武利. 1976.「明治期の新聞投書」.関西学院大学社会学部紀要, no. 33: pp61-70.

土屋礼子. 1991.『仮名読新聞』投書欄の詩歌と作者たち.一橋論叢 105 (2):pp255-274.
長沼秀明,〈笑い〉をめぐる文明開化の時代相 ：『団団珍聞』創刊者・野村文夫, 笑い学研究, 1997, 4 巻, pp 23-30.
内野真緒. 2016.佳作論文 明治期の川柳と都々逸：『團團珍聞』の投書を中心に.國學院雑誌 117 (8):69–80.
岡安儀之. 2012.『新聞記者』の誕生 -福地源一郎の自己認識を中心に. 日本思想史研究, no. 44: 48–67.
佐藤林平. 1979. 黒岩涙香と萬朝報. 英学史研究 1980 (12): 129–35.
梶山秀雄. 2018. 近代日本文学の牽引車としての探偵小説 ——黒岩涙香と翻案小説. 島根大学外国語教育センタージャーナル 13: 17–26.
山下洋子. 2023.歌舞伎の芸談を資料とした近現代日本語の研究.立教大学.
西川薫. 2003.相馬事件と精神病者監護法制定の関連：先行研究レビュー. 現代社会文化研究 26: 35–51.
有山輝雄. 1979. 「理想団の研究[I]」. 桃山学院大学社会学論集 13 (1): p37-64.
有山輝雄. 1980. 「理想団の研究［II]」. 桃山学院大学社会学論集 13 (2): 315–46.
奥武則. 2014.『黒岩大』とは誰なのか：『涙香伝』のために. 社会志林 60 (4): 71–95.
納富信留. 2013. 「理想」とは何か—プラトンと近代日本. 国士舘哲学 17.
杉原四郎. 1971.川口武彦編『堺利彦全集』(全 6 巻 1970～71 年).甲南経済学論集 12 (3): 96–105.
竹内勉. 1981. 民謡：その発生と変遷. 東京: 角川書店.
林葉子.2007.女たち／男たちの廃娼運動：日本における性の近代化とジェンダー.
所由美(도꼬로 유미)(Tokoro, Yumi). 2011. 明治時代の「妾の法的地位」について. 일본어문학 53: 467–92.
長尾洋子. 2019. 越中おわら風の盆の空間誌：<うたの町>からみた近代. 京都: ミネルヴァ書房.
嚴仁卿. 2015.「日本伝統文芸とモダン京城の出会い：朝鮮半島における『都々逸』ジャンルの展開を中心として. 跨境：日本語文学研究 2.pp. 79–94.

辞典
日外アソシエーツ「20 世紀日本人名事典」(2004 年刊)
"「絵入自由新聞」", 日本近代文学大事典

デジタル資料
湯朝竹山人『小唄研究』,アルス,大正 15. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1018907 (参照 2025-01-31)
『新演芸』(1),光友社,1946-09. 国立国会図書館デジタルコレクション

https://dl.ndl.go.jp/pid/1856098 (参照 2025-01-31)
『團團珍聞』,珍聞館,團團珍聞社. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/11210716 (参照 2025-01-31)
藤井美橘 編 ほか『改良都々逸評集自由思想』,金松堂,明 20.5. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1219741 (参照 2025-01-31)